

「さよなら観覧車」

久保田彬穂

【あらすじ】

『あの観覧車に乗った二人は別れる』そんなジんクスのある観覧車が今日、終わりを迎える。

最後の観覧車に乗るのは三組の男女。

20代カップル。幼馴染の高校生。熟年夫婦。

20代カップルは、仲睦まじい落ち着いた雰囲気。しかし彼女のまひろ（28）はどこか寂し気な表情を浮かべる。

幼馴染の二人は、恋人未満の曖昧な関係。

遠くの大学に行ってしまう藍（18）に、伊織（18）は今日こそ告白すると心に決める。

熟年夫婦は、初めから不穏な空気。妻の奈美子（59）は離婚届をポケットに忍ばせ、静かな時間が続く。

すると突然、雷鳴が響き観覧車は止まる。停電で光が消えた街の中、取り残された三組の時間は、静かにゆっくりと動き出す。

離婚届を渡された夫の高史（62）は静かにそれを見つめる。

伊織の決死の告白は、藍には届かなかった。

そして、まひろは恋人と結婚することを隼人（２８）に告げる。二人はカップルではなく浮気関係だった。

それぞれが別れを受け止めきれずにいたとき、アナウンスが流れる。その声は、観覧車をずっと見守ってきた管理人・鴻池（７４）。彼はまるで独り言のように、観覧車がなくなる寂しさ、そして『さようなら』という言葉の意味を語る。

『さようなら』は、ただの別れの言葉じゃない。『左様ならば』、『そういうことならば』、これでお別れしましょう』と、納得したうえで別れを受け止めるための言葉なのだ、と。

——観覧車を降りた伊織は、「まださよならとは言えな」と言い、高史は納得した上で「さようなら」と言い離婚を決意。隼人は、さよならの代わりに「おめでとう」と言い、それぞれに別れと向き合って、新たな一歩を踏み出していく。

【人物関係表】

黒崎まひろ（28） 古着店勤務。

真鍋隼人（26） インディーズバンドのベ
ーシスト。

金森藍^{あゐ}（18） 高校3年生。馬術部部長。

田所伊織（18） 藍の幼馴染。サッカー部
補欠。

平岡奈美子（59） ヨガ教室の先生。

平岡高史（62） 奈美子の夫。元銀行員。

鴻池勇（74） 観覧車の管理人。

○観覧車・外観（夕）

夕日に照らされる観覧車。

○同・受付（夕）

大きな看板、『さよなら観覧車 35年
間ありがとう』とある。

○観覧車前の広場（夕）

たくさんの人が、観覧車の写真を撮っ
ている。

その中に、一人ポツンと佇む鴻池勇（7
4）。

○観覧車・受付（夕）

列に並ぶ黒崎まひろ（28）、真鍋隼人
（26）。

まひろ「観覧車って、何年振りだろ」

隼人「あんま乗らない？」

まひろ「うん、いつ乗るの？」

隼人「大学るとき乗ったな、好きだった子と」

まひろ「へー、そんなベタなことするんだ」

隼人「乗りたいって言うから脈アリかと思っ

たけど、普通に振られた」

まひろ「かわいそ」

隼人「そんな直球やめて」

まひろ「ねえ、ここってジンクスあるらしい

よ」

隼人「ジンクス？」

まひろ「この観覧車に乗った二人は、別れる」

隼人「ダメじゃん」

まひろ「まあまあ、最後だしさ」

隼人「最後？」

まひろ「今日で最後でしょ、この観覧車」

隼人「…ああ、うん」

少しほっとしたような隼人。

その後ろ、制服姿の金森藍^{あい}（18）、田

所伊織（18）。

藍「伊織？」

伊織「…」

藍「いおり」

伊織「あ、え、ごめんなんだっけ」

藍「どしたの？ 今日変だよ」

伊織「あ、なんか、その、うん、なんでもない」

藍「変なの」

伊織のスマホに通知。

友人・仁からのLINE。『当たって砕けてこい！』

伊織「砕ける前提…」

藍「ん？」

伊織「ああ、いや、なんでも」

その後ろ、一人で並ぶ平岡高史（62）。
貧乏ゆすりをしながら、周りを見てそわそわ。

○トイレ（夕）

平岡奈美子（59）、ハンカチで手を拭きカバンにしまう。

カバンの中には離婚届。

奈美子「…」

○観覧車・受付（夕）

戻ってきた奈美子。

高史「遅いよ」

奈美子「え、でもまだ…」

高史「こんなもんに男一人で」

奈美子「…ごめんなさい」

奈美子、肩にかけたカバンの持ち手を強く握る。

○ゴンドラA（夕）

乗り込むまひろと隼人。

座席の真ん中に座るまひろ。

隼人、隣に座りたそうに見てくる。

横にずれるまひろ。

くっついて座る隼人。

まひろ「こういうもん？」

隼人「わかんない」

と、まひろの手を握る。

少し目が合って、隼人が顔を近づけよ

うとすると、まひろが目線をそらす。

まひろ「何分くらいかな」

隼人「17分だって」

まひろ「結構あるね」

窓の外を、寂し気に見るまひろ。

その表情は隼人からは見えず。

○ゴンドラB（タ）

向かい合って座る藍と伊織。

藍「なんで急に観覧車？」

伊織「え、それは、ほら、今日で最後だし」

藍「ああ、伊織ってそうだよね」

伊織「え？」

藍「卒業式でも同じこと言ってた」

伊織「ほんと？」

藍「（泣きまねしながら）『みんなでいられるの、今日で最後なんだよ』って」

伊織「あー、小学校の？」

藍「違うよ、中学」

伊織「え、俺中学の卒業式でそんなに泣いて

た？」

藍「いっちばん泣いてた」

伊織「かつこわるう」

藍「何なんだろうね」

伊織「え？」

藍「終わるって分かると急に寂しくなるの」

伊織「…」

藍「…」

伊織「…あのさ、アイちゃん」

藍「ん？」

伊織「あ、えっと…、いつからだっけ、京都
行くの」

藍「4月入ったらすぐ」

伊織「そっか」

藍「聞いてよ、入学前からさ、馬に会えるん
だって」

藍のリュックには馬のキーホルダー。

伊織「へえ、さすが推薦」

藍「どんな子たちがいるのかな」

伊織「…」

○観覧車・外観（夕）

ゆつくりと回る観覧車。

○ゴンドラC（夕）

対各に座り、それぞれ窓の外を見ている奈美子と高史。

頂上付近からの景色を眺める。

高史「…」

奈美子、ふと高史に視線をやる。

全く奈美子を見ない高史。

窓の外に視線を戻す奈美子。

窓に水滴が付く。

奈美子「雨」

雨粒がどんどん増えていく。

奈美子「…」

○空（夕）

一気に暗くなる空。

○ゴンドラ A (タ)

隼人「なんかやばそう」

まひろ「大丈夫かな」

○観覧車・外観 (タ)

強い雨。

強く光り、バリバリと雷の轟音が鳴り響く。

○ゴンドラ B (タ)

藍「すごっ、めっちゃ光った！」

楽しそうな藍。

伊織「ひいいなんだよお」

耳を塞ぐ伊織。

電気が消える。

藍「え」

○観覧車・外観 (タ)

ライトアップが消え、止まる観覧車。

○街（タ）

街から明かりが消えていく。

○ゴンドラA（タ）

まひろ「え…」

隼人「止まったね」

○ゴンドラC（タ）

高史「…」

奈美子「…」

アナウンス音が流れる。

アナウンス「ただいま停電の影響により、一時停止しております」

○ゴンドラB（タ）

アナウンス「運転再開まで、しばらくお待ちください」

藍「うおお、なんかいいね」

伊織「よくないって…」

藍「前ニュースであつたよね、観覧車に閉じ

込められたってやつ」

伊織「え、やめてよ」

藍「何時間もさ、風に揺られて…」

伊織「え待って、落ちたらどうしよう。死ぬ？

さすがに死ぬよね…」

藍「ね、いおりんになってる」

伊織「やめてってばその呼び方」

藍「なんでも怖がってたもんね、私の後ろに
ずっといて」

伊織「アイちゃんは怖がらなすぎなの。変な
虫とか平気で触るんだもん」

藍「だって、伊織面白いんだもん」

伊織「性格わる」

藍「は？」

伊織「いや、なんでもないです」

○ゴンドラA（タ）

まひろ「ねえ待って、ここ頂上？」

隼人「ああ、そうかも」

少し嬉しそうに窓の外を見ているまひ

ろ。

後ろから、不意にキスする隼人。

まひろ「え」

隼人「なに」

まひろ「いや、ロマンチックすぎない？」

隼人「そう？」

まひろ「なんかベタすぎて、自分の人生じゃないっていうか」

隼人「じゃあ、もっとベタなことしちやおうかな」

まひろ「え？」

隼人「はい」

プレゼントを渡す隼人。

隼人「誕生日、遅くなっちゃったけど」

プレゼントを見つめるまひろ。

何かばつが悪そうな表情。

まひろ「……」

隼人「やっぱいらなかった？」

まひろ「いや、その……」

隼人「……」

まひろ「隼人。あ、えっと」

隼人「…」

まひろ「その…」

隼人「…」

まひろ「話したいことが、あって」

○ゴンドラC（夕）

スマホを見ている高史。

高史「うちも停電かもな」

奈美子「あら、どうしよう」

奈美子を見る高史。

奈美子「いや…炊飯器、セットしてて」

高史「…ああ、かしわ飯か」

奈美子「最後のなにね」

高史「…」

奈美子「…」

高史「まあどうにかなるだろ」

奈美子「どうにかするのは私ですけど」

高史「…」

○ゴンドラB（タ）

手持無沙汰な藍と伊織。

藍「しりとりする？」

伊織「しないよ、子どもじゃないんだから」

藍「じゃあなんかしゃべってよ」

伊織「待って、今整理してるの」

藍「整理？」

伊織「うん、そんないきなり言うもんじゃないから」

藍「何の話？」

伊織のスマホに通知。仁『頂上で告白
な！』

伊織「（小声で）頂上：までもたないかも」

藍「え？」

仁『絶対告れよ』『今日逃したらないぞ』

藍「ねえ聞ってる？」

続くスタンプの嵐。

伊織「ああうるさいなっ」

藍「え？」

伊織「いや違う、違って、ラインが、クラス

の
」

藍「なんか、今日スマホばっか見てるね」

伊織「いや」

藍「…」

伊織「…」

○観覧車・外観（夕）

動かない観覧車。

街の明かりは暗いまま。

○観覧車前の広場（夕）

誰もいなくなった広場。

雨はパラパラと小雨に。

○ゴンドラA（夕）

まひろ「…」

隼人「なに？」

まひろ「ごめん、やっぱ大丈夫」

隼人「え？」

まひろ、気を取り直して。

まひろ「開けていい？」

隼人「うん」

箱を開けると、一本のバラ。

まひろ「：」

隼人「残らないものがいかなかった」

まひろ「え、なに、今日そういう日？」

隼人「そういう？」

まひろ「ベタってというか、キザってというか」

隼人「あー、どうだろ。そういう日？」

まひろ「バラなんて初めてもらった」

隼人「俺も初めて買った。ちょっと緊張した」

まひろ「：ありがと」

隼人「うん。：あ、雨やんだ？ そろそろ動

くかな」

まひろ「（ぼそっと）動かなくていいかも」

隼人「え？」

まひろ、隼人に抱き着く。

隼人「え？ どした」

まひろ「ん」

隼人「いつものじゃないじゃん」

まひろ「うん」

隼人「…」

まひろ「そういう日」

○ゴンドラC（タ）

奈美子「…」

高史、腕を組み、目をつむっている。

奈美子、そおっとカバンの中の離婚届
を取り出す。

そのとき、カバンが倒れる。

奈美子「あっ」

中身が飛び出し、ペットボトルのお茶
が高史の足元に転がる。

ペットボトルを拾う高史。

奈美子「ごめんなさい」

ペットボトルを渡した高史の視線の先
に、離婚届。

高史の視線に気づき、後ろに隠す奈美
子。

高史「…」

奈美子「……」

○ゴンドラB（タ）

藍「え？」

伊織「……」

藍「……どうゆうこと？」

伊織「だから、どう思ってるのかなって」

藍「どうって、伊織は伊織だよ」

伊織「うん、そうなんだけど…… ごめん、忘れて」

藍「待って。ずるいじゃん」

伊織「え」

藍「逃げないでよ」

伊織「いや」

藍「自分の気持ち言わないで相手に聞くのはずるくない？」

伊織「……」

藍「……もういい」

伊織「……」

○ゴンドラA（タ）

隼人「写真撮る？」

まひろ「真っ暗なのに？」

隼人「真っ暗だから」

隼人、スマホを構え、自撮りする。

写真を確認。

隼人「暗すぎ」

まひろ「言ったじゃん。あ、私の綺麗に撮れるよ。最新だから」

隼人「俺のが古いみたいに言わないで」

まひろ「いつ買ったのそれ」

隼人「5年前」

まひろ「えっ、5年も使えるんだ」

隼人「うん全然。急に画面暗くなったりはするけど」

まひろ「限界じゃん」

自撮りしようと構える。

隼人、顔を密着させる。

まひろ「ちか」

隼人「はい撮って」

まんざらでもないまひろ。

シャツターボタンを押そうとしたその

時、LINEの通知。

奥村和也から『顔合わせの店ここでい

い？』

隼人「え」

まひろ、スマホをおろす。

隼人「…」

まひろ「…」

隼人「彼氏？」

まひろ「…うん」

隼人「…結婚、するの？」

まひろ「…」

まひろM「初めは、ただの店員とお客さんだった」

○3年前・まひろが働く古着屋

ベースを背負っている隼人。

まひろM「いかにもバンドマンという彼は、いつも私が仕入れた服を買っていく」

服を手取る隼人。

それを見ているまひろ。

まひろ M「普通の人は着ないような服だから、
だいたいいつも売れ残る」

× × ×

日替わり。

入ってくる隼人、まひろと目が合い会
釈。

会釈し返すまひろ。

服を手取る隼人。

まひろ M「会話は最低限しかない。だけど
あまりにも私の服ばかり買っていくので、
勇気を出して声をかけた」

まひろ 「いつもありがとうございます」

隼人 「ああ、こちらこそ」

まひろ 「それ、私が仕入れたやつなんです」

隼人 「あ、そうなんです」

まひろ 「…」

まひろ M 「急に話しかけてキモかったかな、
なんて思ったり」

隼人「いつもここで本番衣装買うんです。あ、バンドやってて」

まひろ「へえすごい、バンドですか」

まひろM「見ればわかるよ、と思ったけど、ちゃんと知らなかったみたいに関いたり」
隼人「あの、これ良かったら」

ライブのチラシを受け取るまひろ。

まひろ「…」

まひろM「そんな色々気にしてる自分珍しいなって思ってた」

○大型のライブハウス（夜）

舞台上で演奏する隼人のバンド。

まひろの店で買った服を着て、楽しそうにベースを弾く隼人。

まひろM「どうせ売れないバンドマンだろうと思っていたら、人気インディーズバンドだった」

ノリノリの観客の中、一番後ろで静かに見ているまひろ。

まひろ M「私が好きな服を着ていたからか、
彼にしか目がいかなかった」

まひろ、隼人を一点に見つめている。

○まひろの働く古着屋

まひろにお土産を渡す隼人。

まひろ M「それから店でも話すようになって」

○居酒屋（夜）

酒を飲んで笑い合うまひろと隼人。

まひろ M「飲みに行ったり」

○美術館

一枚の絵に見惚れているまひろ。

まひろ M「美術館とか博物館とか、デート的
なことをするようになった」

まひろの隣に来た隼人。

一緒に絵を見ながら、隼人の手がまひ
ろの手に触れる。

びっくりして手を離すまひろ。

隼人「…」

まひろ「…」

まひろの手が、隼人の手にゆっくりと絡む。

静寂の中、美しい絵を前に手を繋ぐ二人の後ろ姿。

まひろ M 「彼から好きと言われて、初めて彼氏がいることを明かした」

○ 駅のエスカレーター

まひろ M 「でも二人で会うときは都合よく忘れて」

上りのエスカレーターに乗るまひろ。
すぐ後ろに、一段も空けずに乗る隼人。
ちょうど顔が同じ位置に来て、目が合う。

近すぎて、顔をそらすまひろ。

隼人、まひろの顔を引き寄せる。

誰もいないエスカレーターで、キスをする二人。

○ラブホテル（夜）

布団をかぶり、まぐわう二人。

まひろ M 「彼氏に不満はない。なのに、どうしようもなく惹かれていった。——もう、罪悪感すら抱かなくなっていた」

○戻って、ゴンドラ A （夕）

まひろ 「：この間ね、自転車のかごにゴミが入ってた」

隼人 「：うん」

まひろ 「そのとき思った。『最低』って」

隼人 「：」

まひろ 「でも、どっちが最低なんだろうね」

隼人 「：」

まひろ 「人のかごにゴミ入れる人間と、——

浮気してる人間」

隼人 「：まひろ」

まひろ 「ごめん」

隼人 「：」

まひろ「もう会えない」

隼人「……」

○ゴンドラB（タ）

伊織「メジナ」

藍「なつめ」

伊織「め、綿棒」

藍「梅」

伊織「っていうかいつまでしりとりするの？」

藍「降りるまで」

伊織「しりとりする高校生いないよ」

藍「しょうがないじゃん、他にすることある？」

伊織「……」

藍「自分で気まづくしたくせに」

伊織「……なんだっけ、め、め……メソポタミ

ア文明」

藍「いじめ」

伊織「め……もう、めで責めないでよお」

藍「しりとりってそういう遊びだから」

伊織「め……め！ほら、目！」

藍「め…」

伊織「やった、形勢逆転」

藍「めん」

伊織「ん、終わっちゃった」

藍「…」

伊織「…」

藍「ごめん」

伊織「ん？」

藍「さつき。なんか、イライラして」

伊織「ああ、いや、それは俺が…」

藍「…小学校のときさ、ポニーランド行った
じゃん」

伊織「え？」

藍「伊織んちとうちのみんなで」

伊織「ああ、うん。俺怖くて乗れなかったけ
ど」

藍「あのときなんだ、私が馬を好きになった
の」

伊織「…」

藍「伊織のせいだからね」

伊織「え？」

藍「『アイちゃんかったこいい！』ってもうずつ

と」

伊織「…」

藍「お母さんより褒めてくれて」

伊織「そうだっけ」

藍「覚えてないの？」

伊織「覚えてます。はい、はっきりと」

藍「こっちは人生変わったのに」

伊織「…」

藍「なんか悔しくなってきた。だって伊織だ

よ」

伊織「そんなこと言わなくても」

藍「…本当はさ、私もちよっと思ったりした」

伊織「え？」

藍「伊織の… こと…？」

伊織「えっ？」

藍「いや違う。その、これと一緒に」

伊織「これ？」

藍「ずっとあったものが急に無くなったら寂

しいっていうかさ」

伊織「…ああ」

藍「でも勘違いしちゃダメなんだって」

伊織「何が？」

藍「寂しいと、好き？」

伊織「…」

藍「『寂しさを埋めるための恋は、更なる寂しさを生む』」

伊織「誰の言葉？」

藍「インスタで見た」

伊織「え、そんな誰かも分かんない人の？」

藍「でも確かについて思った」

伊織「ちよっと左右されすぎじゃない？」

藍「は？」

伊織「すいません。いやでも、ほら、もし勘違いだとしても、いいよ」

藍「…」

伊織「俺全然大丈夫。すぐ振られても」

藍「…」

伊織「だから、アイちゃんの、その…彼氏的

なものに…」

藍「…」

○ゴンドラC（タ）

奈美子「ずっと、もうずっと考えてた」

高史「またあれか、周りに流されて」

奈美子「…」

高史「今流行りの熟年離婚。いつもそそのかされて」

奈美子「違います」

高史「…離婚なんて」

奈美子「…」

高史「…雄太は」

奈美子「…」

高史「あいつが帰ってきたら」

奈美子「…」

高史「…」

奈美子「雄太は帰ってきません」

高史「…」

○観覧車・外観（夕）

奈美子の声「もう帰ってこないの」

○20年前・観覧車・外観

青空の中の観覧車。

奈美子M「あの日から20年――」

○観覧車前の広場

観覧車の列へと、奈美子（39）の手
を引っ張る雄太（7）。

その後ろ、微笑ましく二人を見る高史
（42）。

○ゴンドラ

奈美子M「三人で乗る初めての観覧車は、こ
の上なく幸せだった」

キラキラした目で外を見る雄太。

奈美子も一緒に外を眺め、その様子を
デジカメで撮影する高史。

奈美子M「でも」

○観覧車前の広場

空は暗くなり、地面に雨がポツポツと打ちつける。

雨の中、雄太を探す奈美子と高史。

奈美子 M 「少し目を離れた隙に、雄太はいなくなっただけ」

足早に去っていく人々。

広い空間に残された、奈美子と高史。

○平岡家・リビング（夜）

憔悴しきっている奈美子。

奈美子 「……」

目の前に差し出された、かしわ飯。

奈美子、高史を見上げる。

高史 「食べよう」

奈美子 「……」

高史、奈美子の向かいに座り、かしわ飯を頬張る。

奈美子「……」

奈美子、涙をこらえて、ゆっくりと箸に手を伸ばす。

奈美子M「その日の夕飯は、雄太の大好きなかしわ飯だった」

少しずつ、ゆっくりと噛みしめて食べる奈美子。

奈美子M「初めて夫が作ったそれは、ほとんど味がなかった」

○戻って、観覧車・外観（夕）

奈美子M「それから、毎年この日は観覧車に乗って、かしわ飯を食べる。それが私たちの――」

高史の声「しないよ」

○ゴンドラC（夕）

高史「離婚はしない」

奈美子「……」

高史「雄太は、……帰ってこない」

奈美子「∴」

高史「でも離婚とそれは関係ない」

奈美子「あるの」

高史「∴」

奈美子「私たちが一緒にいる理由なんて、もう雄太しかないでしょ」

高史「∴∴」

○ゴンドラA（タ）

まひろ「∴」

隼人「∴今日で最後ってこと？」

まひろ「うん」

隼人「∴」

まひろ「∴」

隼人「会うだけでも」

まひろ「だめ」

隼人「∴」

まひろ「もうすぐデビューでしょ」

隼人「∴」

まひろ「だめだよ不倫なんて」

まひろの手を取る隼人。

まひろ「だめだって」

隼人「最後」

まひろの手を握る。

まひろ「…」

隼人「…」

アナウンス音が鳴る。

顔を上げる隼人。

鴻池の声「皆様、ながらくお待たせしております」

○ゴンドラC（タ）

高史「…」

鴻池の声「もう間もなく、運転再開いたします」

○ゴンドラB（タ）

藍「…」

鴻池の声「これは、しがない管理人の独り言なのですが」

○観覧車・管理室（夕）

マイクの前に座っている鴻池。

鴻池「私は35年間、この観覧車を見てきました」

○観覧車・外観（夕）

鴻池の声「私が生きているうちに、この観覧車が無くなることなどないだろうと、当たり前のように思っていました」

○街（夕）

高いビルなどがちらほら。

鴻池の声「この辺りの景色も随分と変わり、よく通っていた本屋も友人の家の駄菓子屋も、もうありません」

○ゴンドラC（夕）

美奈子「…」

鴻池の声「——たくさんの別れがありました」

○ゴンドラB（タ）

伊織「…」

鴻池の声「今日は、この観覧車とお別れの日です」

○ゴンドラC（タ）

高史「…」

鴻池の声「『さようなら』」

○ゴンドラB（タ）

藍「…」

鴻池の声「それは、ただの別れの挨拶とは少し違います」

○ゴンドラA（タ）

まひろ「…」

鴻池の声「『左様ならば』」

隼人「…」

鴻池の声「『そういうことならば、これでお別

れしましょう』と、別れを受け止める言葉
だったのです」

○観覧車・管理室（夕）

鴻池「だから今日、私がこの観覧車に贈る言
葉は――」

○観覧車・外観（夕）

夕日の中、ライトも消えた観覧車。

○ゴンドラB（夕）

藍・伊織「…」

○ゴンドラC（夕）

美奈子・高史「…」

○ゴンドラA（夕）

まひろ・隼人「…」

○街（夕）

街の明かりがだんだんついていく。

○ゴンドラC（タ）

同じ窓の外を見ている奈美子と高史。

○ゴンドラB（タ）

電気が付く。

伊織「あ」

藍「ついた」

○観覧車・外観（タ）

観覧車のライトが付き、動き出す。

○ゴンドラA（タ）

動き出し、顔を見合わせるまひろと隼人。

○ゴンドラB（タ）

伊織「はあ、よかったあ」

藍「…」

伊織「？」

藍「ごめん」

伊織「…」

藍「やっぱわたし、そんな器用じゃない」

伊織「…」

藍「部活して、勉強して、恋愛。しかも遠距離
離って」

伊織「うん」

藍「だから、ごめん」

伊織「…まあ確かに、アイちゃん不器用だも
んね」

藍「は？」

伊織「家庭科の糸通し、いつも俺やらされて
たし」

藍「それは…」

伊織「でもアイちゃん、今じゃない？」

藍「え？」

伊織「今、頂上だよ」

藍「うそ」

慌てて外を見る藍。

伊織「わざわざ頂上で振らなくても」

藍「ごめん、それはほんとに」

伊織「ふふ」

笑い合う二人。

○ゴンドラC（夕）

高史、奈美子が持っている離婚届を見ている。

奈美子「…」

高史「いつから」

奈美子「…」

高史「いつから俺はこんな」

奈美子「…」

高史「趣味もない。友達も、…守るものも」

奈美子「…」

高史「体はどこも痛いし、加齢臭だのなんだの」

奈美子「…」

高史「俺がなにした？　なんかしたのか？」

奈美子「…」

高史「働いて、働いて働いて…」

奈美子「…」

高史「はあ…」

奈美子「…」

高史「(乾いた笑い)ふっ」

奈美子「…」

高史「そうだよな。そりゃそうだ」

奈美子「…」

高史「捨てられて当然か」

奈美子「…」

高史「…でもさ」

奈美子「…」

高史、離婚届に目をやって

高史「そんなもん、家の引き出しに入れるな

よ」

奈美子「……」

○ゴンドラA(夕)

まひろ「…」

隼人「…」

まひろ「…」

隼人「結婚式するの？」

まひろ「たぶん」

隼人「じゃあ、花嫁奪いに行っちゃおうかな」

まひろ「…」

隼人「冗談」

まひろ「…」

隼人「あ、冬はやめた方がいいよ。友達と

きみんな寒そうだったから」

まひろ「うん」

隼人「あ、あと当日いきなりビデオメッセー

ジ撮るのとかも」

まひろ「…」

隼人「あ、あと場所は…」

まひろの表情を見て言うのをやめる。

まひろ「…」

隼人「…」

まひろ、外を見て。

まひろ「もうちょっとだね」

隼人「…うん」

まひろ「あっという間だったな」

隼人、繋いだ手を見つめている。

まひろ「：」

隼人「：」

アナウンス「まもなく、扉が開きます」

立ち上がるまひろ。

繋がれていた手、ゆっくりとほどけていく。

まひろ「：」

座ったまま、目を合わせない隼人。

○観覧車前の広場（夕）

自撮りする伊織。

藍「全然入ってないよ」

伊織「これ無理だって」

藍「あ、ちよつと撮ってもらお。すいませーん」

美奈子と高史に呼びかける。

× × ×

遠くから、なんとか頑張っ
て撮ろうと

する美奈子、高史。

高史「こうか」

美奈子「それじゃ上が。もっとうして」

まひろ「やりましょうか？」

美奈子「あ、すいません」

まひろ「これ、逆さにするといいですよ」

スマホを逆さにして、地面に近づけて

構える。

まひろ「いきますよー、はい、チーズ」

× × ×

藍、伊織、確認して。

藍「おお、めっちゃいい！」

伊織「ありがとうございます」

美奈子「お役に立てなくて」

伊織「いえいえ」

藍「あ、皆さんも撮りましょうか」

美奈子「あ、私たちは…」

高史と顔を見合わせる。

まひろ「うちも…」

隼人と顔を見合わせる。

隼人「大丈夫です」

藍「…はい、じゃあ、ありがとうございました
た」

伊織「ありがとうございました」

藍「あ」

きちんと皆の方へ向き直して。

藍「さようなら」

少し照れながら、皆口々に「さよう
ら」と。

○道（夕）

歩いている藍、伊織。

伊織、立ち止まって。

伊織「アイちゃん」

振り返る藍。

伊織「俺、まだ言えないけど」

藍「え？」

伊織「まだやりたいこととかわかんないけど、
ちゃんと見つける」

藍「…」

伊織「見つけて、アイちゃんみたいにかつこ
よくなる」

藍「かつこよく」

伊織「だから、お互い頑張って、また会お」

藍「…」

伊織「で、もう一回ちゃんと告白するから」

藍「むり」

伊織「え？」

藍「かつこよくななんてムリ」

伊織「ええ…」

藍「いいの、そのまま」

伊織「…」

藍「そんな伊織だから…」

伊織「…」

藍「…行くよ」

伊織「だから？ だからなに？」

藍「いいから」

伊織「あとちよつとなのに…」

なんだかんだ言いながら歩いていく二
人。

○車内（夕）

運転する高史。

助手席に奈美子。

高史「帰ったら書くから」

奈美子「そんな急がなくても」

高史「いや、今日書かないと」

奈美子「そう」

高史「…止まってよかったかもな、観覧車」

奈美子「え？」

高史「…」

奈美子「…」

高史「…サヨウナラ」

奈美子「なに急に」

高史「なになって、話聞いてなかったのか？」

奈美子「聞いてたけど、どういうこと？」

高史「もういい」

奈美子「だって同じ家に帰るのに」

高史「気持ちの問題だろって」

奈美子「え、どういうこと？」

高史「まったく情緒がないな」

奈美子「あっ」

高史「…」

奈美子「かしわ飯、大丈夫かしら」

高史「またそれか」

奈美子「作り直しかな」

○道（夕）

走っていく車。

高史の声「じゃあ俺が作るよ」

奈美子の声「えーやめてよ」

高史の声「なんだよ人がやるって言ってるのに」

奈美子の声「味しないもの」

高史の声「なっ…」

奈美子「ふふ」

○観覧車前の広場（夕）

まひろ、隼人、向き合って。

まひろ「じゃあ、ね」

隼人「…」

まひろ「これ（バラ）貰っていいのかな」

隼人「貰って。返されても、きつい」

まひろ「だよね」

隼人「…」

まひろ「ドライフラワーにでもしよっかな…」

隼人「…」

まひろ「なんて」

隼人「…」

まひろ「これ、さようならって言った方がい

いやっ？」

隼人「まひろ」

まひろ「…」

隼人「おめでとう」

まひろ「…」

行ってしまう隼人。

まひろ「…」

遠ざかっていく隼人の背中。

まひろ「…」

隼人を目に焼き付けるように、微動だ

にしないまひろの後ろ姿。

一人、広場に残されたまひろ。

○観覧車・外観（夕）

ピカピカと光る観覧車。

○観覧車前の広場（夜）

一人、観覧車を見上げる鴻池。

○観覧車・外観（夜）

ピカピカと光る観覧車。

○同・管理室（夜）

入ってきた鴻池、観覧車のスイッチを切る。

（終）